

## 6. 現 職 教 育 (道徳教育)

### 1. 本校道徳教育目標

教育活動全体を通して、共感する心を大切にしながら、道徳的心情や道徳的判断力、道徳的実践意欲・態度などの豊かな道徳性を育てる。

### 2. 道徳教育を通してめざす子どもの姿

- ・自分らしさを生かし、明るく生活する子。
- ・思いやりの心をもつ子。
- ・自然を愛し、生命あるものを大切にする子。
- ・地域や社会のために進んで働く子。

### 3. 研究主題

「豊かな心を持ち、よりよく生きようとする子どもを育てる道徳教育」

～ 共感・共生・共創 ～

### 4. 主題設定の理由

本校の児童はおおむね温厚、素朴で、親しみやすい性格の子が多い。自分が指示されたことについては、責任をもって取り組むことができる。しかし、自分から課題をもち、その課題解決に向けてよく考え、判断し、主体的に取り組んでいこうとする意欲にやや欠ける面がある。そして、現代の子どもに多く見られる傾向であるが、本校の子どもたちのなかにも、人との接し方、関わり方がうまくいかない子もいる。コミュニケーションの取り方が下手なばかりにトラブルになってしまったり、人間関係がうまく構築できないこともある。

以上のような実態から、豊かな心を持ち、主体的に取り組む、最後までよく考え、判断・行動し、自他共によりよく生きていこうとする子どもになってほしいと考えた。これは、すなわち「生きて働く力の育成」である。

しかし、このような子どもの育成は、一つの教科や領域だけで達成できるものではない。それぞれの領域が相互に絡み合い、各教科・特別活動・道徳の時間・総合的な学習の時間を相互に関連させながら、学校教育活動全体を通して、系統的・計画的に指導を進めていかねばならない。そうすることで成果を上げていくものであると考えている。そして学校生活をはじめとする日常生活のさまざまな場面で立ち止まり、自己を振り返ることはもちろんのこと、学習集団の一員として、互いに磨き合いながら、相手のことを認め合い、励まし合いながら培っていけるものであると考えている。

しかも、これらのことを進めていくときに、受動的にあるのではなく、主体的に事象や課題に対して関わり、追究していこうとすることで、より効果的なものとなるのと考えている。

そこで、考える力を生かして、相互に伝え合い、ひびき合えることをめざし、道徳教育を窓口として取り組むこととした。

### 5. 研究主題について

「豊かな心」とは、自他共によりよく生きていこうとする心情であり、すなわち「感じる力」であるにとらえている。それは「思いやりの心」であり、「感動する心」である。これはすなわち相手の心情に共感し、ひびき合える心であるということである。ここでいう共感とは、単なる同情のことではない。同情というのは、客観的に相手のことについて「かわいそうだ」などと思うことであり、共感とは相手の思いに自分の思いが同化することである。

相手と思いを同化（共感）し、ひびき合う心に加え、困難なことによつかったときに、それを

乗り越えていけるたくましさをもった心も豊かな心の一つであろう。

この豊かな心というのは、他者との関わりの中で育まれるものであり、その対象は人間だけでなく、自然や動植物なども含まれるのである。これらのものとの関わりを豊かにすることによって、日常生活や社会生活をより充実させていくことができると考えている。

「よりよく生きる」とは、自己を見つめ、自分自身を素直に認め、謙虚に自己内省することによって、よりよい生き方を自覚し、自分を向上させていくことである。自己を見つめることによって、さまざまな場面において多様な価値観を自分自身の問題として受け止め、自分自身を振り返り、正しく判断し、強い意志をもって努力していくことができるようになる。道徳的心情や道徳的判断力、道徳的実践意欲・態度は、子ども自身の人間としての生き方についての自覚を深めることと関わって指導されてこそ、真に子ども自身のものになると考える。

豊かな心を持ち、よりよく生きようとする子どもを育てるためには、他者との関わりの中で共感しながら、よりよい生き方を追究していくことが大変重要であり、道徳の時間を意義あるものにするによって、より充実したものとなるはずである。また、道徳の時間の指導だけでなく、他領域の具体的な活動の場で子どもたちを認め、励まし、よりよく生きようとしている姿・行為をほめ、自己を見つめさせていくことで、生きていく意味を求め、生きている喜びを感じ、よりよく生きようとする子どもに育てることができると考える。

## 6. サブテーマについて

道徳教育の意義は、「人間としてよりよく生きる一人格としての道徳性の育成」にある。そして、ここでいう「道徳性」とは、人間としての本来的な在り方やよりよい生き方を目指してなされる道徳的な行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤をなすものである。それはまた、人間らしい良さであり、道徳的諸価値が一人一人の内面において統合されたものといえる。

これをふまえ、また、研究主題を達成するためには、「共感・共生・共創」の心をもつことが大切であると考えた。

人間が生きていく上で、また社会を構成し、よりよく生きていこうとするためには、まず、他者を受け入れ、身の回りで起こる事象に対して共感する心を持つことが大切である。相手を受容することがまず第1歩であろう。

次に、よりよい社会を構成していけるのは、豊かな道徳性を持ち、相手のことを思いやり、人々が協力しているからである。共生を考えたときに、思いやりの心や協力する態度などを抜きには考えられないのである。一人一人に安心できる居場所があり、自己肯定感があるところでは、人はよりよく生きていこうとする意欲が芽生え、ともによりよいものを創造していこうとする（共創）ようになる。そんな気持ちや心をもった時、そんな態度になれたとき、人は生き生きと輝けると考えている。

## 7. 研究の重点

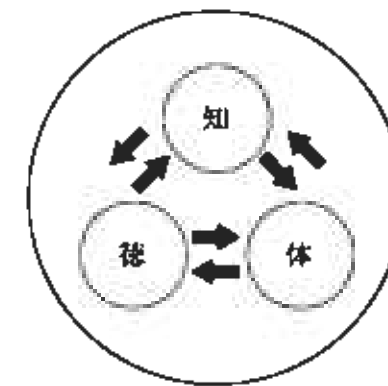
本校は平成18・19年の2年間文部科学省の「児童生徒の心に響く道徳教育推進事業」の研究指定、平成20・21年度は市の指定を受け、道徳教育の充実を目指し、研究を進めてきた。22年度からもさらに2年の指定を受け、研究を深めたいと考えている。

研究を進めていくにあたり、知・徳・体の3つのことについての基本的な考え方を以下に記してみる。

まず、人間というのは、行動が第1にある。つまり体を動かすことにより、何かを体験するのである（体）。そしてその体験したことについて感じ、何か思いをもつのである（徳）。さらにその感じたことや体験したことを根拠にして思考をし、知識・理解として定着していく（知）。

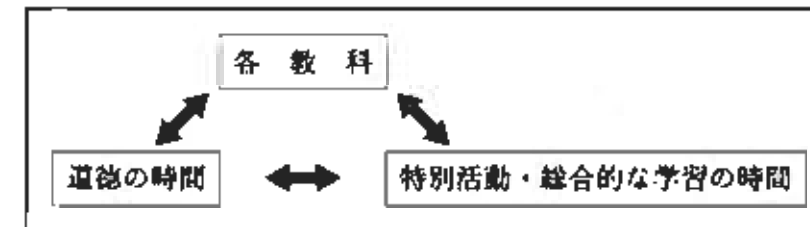
また、今記したような一方通行的な流れだけではなく、知・徳・体がそれぞれ相互に絡み合いながら豊かな人間性をもった一人の人間として成長していく。

図で表すと以下のように考えている。



豊かな人間性

学校生活では、これらのことを達成する場として、下の図に示したような関連が見られると考える。



これらをふまえ、次に示す7つのことを今年度の研究の重点として研究を進めていきたいと考えている。

### (1) 道徳の時間の指導の充実

道徳教育を進めていくとき、その核となってくるのが週1回の道徳の時間である。

「よりよく生きていこうとする子ども」の育成を考えたとき、道徳の時間の充実を図ることが、道徳的な価値をより深く自覚するために大切なことである。そして、自分の今までの生き方を振り返ることで、これからの生き方について考えていくことができるのである。そしてそれが、道徳的実践力の育成へとつながると考えている。

子どもたちの心に響く道徳の時間とするために、目の前の子どもをしっかりと見つめ、子どもの実態をしっかりと把握することに努め、資料の選択・分析、学習の展開を工夫していきたい。特に、心に響かせるための発問の工夫を中心に道徳の時間の充実を図っていきたいと考えている。

### (2) 総合単元的な道徳学習の展開

子どもたちは日常の学校生活を含む教育活動全体において、さまざまな体験をしている。その中には多種多様な道徳的価値が含まれている。それらを補充・深化・統合するのが道徳の時間であり、話し合い活動を通して自己を見つめ、振り返り、生き方を考えることで道徳的心情を高め、道徳的実践力を育成するのである。そのためにも本校では総合単元的な道徳学習を展開し、子どもたちの意識の連続性を持たせる工夫をしていきたいと考えている。この展開をすることで子どもたちの内面に力が湧き、生きてはたらく力へとつながっていくものと考えている。

### (3) 学級経営の充実

学習の基盤となる学級に、「本音を言える雰囲気や支持的風土」をつくり、互いを認め合い、安心して話のできる学級をつくっていくようにしたい。その際、人権教育部や生活指導部・特別支援教育部と連携をとりながら、学級経営についての交流を行うことで、よりよい学級経営の在り方についての研修を深めたいと考えている。

### (4) 心を育てる体験活動の場（特別活動や総合的な学習の時間の充実）

子どもたちはさまざまな体験を通して色々なことを学んでいく。体験を通して学んだことは、



子どもたちの心にしっかりと根づき、一つの価値判断基準として残っていく。

そこで、特別活動や総合的な学習の時間を充実し、心を育てる体験活動の場として意図的・計画的に設定していきたいと考えている。

すなわち、総合的な学習の時間では、自分の課題解決に向け、追究していく過程で、人間や自然などさまざまな対象と深く広く関わる場と時間を保障していくことが大切であると考えているし、特別活動では「なすことによって学ぶ」といわれるように活動を通して、自己肯定感（自尊感情）や集団所属の欲求の充足（個人としての自分の居場所の確保）をもたせることができると考えている。

体験活動を通し、一人一人が自分を向上させ、さらに友との関わりを通して共感する喜びや楽しさ、体験活動自体への驚きを感じることで道徳的心情が高まりよりよく生きていこうという子どもを育てていきたいと考えている。

#### (5) 教科指導の充実

本校は、子どもの学びの姿勢を大切に学習の展開を工夫することに取り組んできた。今までの取り組みの積み上げを生かし、継続しながら、教科指導を充実し、興味関心や意欲を高め、知識・技能・思考力を身につけさせ、学力の定着をめざしていきたいと考えている。そしてその力を生かすことで学校生活や日常生活において主体的にかかわり、事象に対して対応していけるものであると考えている。

#### (6) 読書活動の充実

読書をすることにより視野を広め、生活を豊かにするとともに、文学作品を通じ深く考えたり、感じたりする豊かな心情が養われる。そのために読書活動を推進していきたいと考えている。

#### (7) 家庭・地域社会との連携

子どもたちの生活の基盤は家庭であり、地域社会である。そこで学校だけでなく、家庭や地域社会の教育力を生かして心を育てる教育の場・体験の場として大切にしていきたい。そのためにも学校と家庭・地域社会が密に連携していきたいと考えている。

### 8. 指導重点項目（教師の願い学年の実態をもとに）

（学校全体として重点的に行うもの）

内 容	項 目
①主として自分自身に関する事	正直・明朗・誠実
②主として他の人との関わりに関する事	思いやり・親切、協力
③主として自然や崇高なものとの関わりに関する事	生命尊重
④主として集団や社会との関わりに関する事	公徳心、公正・公平

（各ブロックごとの重点項目）

1, 2年	3, 4年	5, 6年
生命尊重	規則遵守・公徳心	生命尊重
規則遵守・公徳心	生命尊重	親切・思いやり
信頼友情	正直・明朗	正直・誠実
礼儀	思いやり・親切	役割・責任
正直・明朗	礼儀	公正・公平

### 9. 研究の内容と方法

#### (1) 道徳の時間の指導の工夫について

研究の視点：互いにひびき合い、みがき合いながら、話し合い活動を深め、ねらいとする価値意識を高める学習展開の工夫

「道徳の時間」は、今までの自分の生き方について、またこれからの自分の生き方について考える時間であり、まさに道徳教育の中核をなすものである。だからこそ学習内容に対して主体的に関わり、しっかりと考えていこうとする意欲を喚起するような学習展開をしていく必要がある。

また、道徳の時間は、児童一人一人のこれまでの生活体験をもとに話し合い、自分とは違った価値観に出会う場であり、よりよい自分の生き方について考える場である。そして、道徳の時間以外の教育活動における道徳教育を補充・深化・統合する時間でもある。

「補充」とは各教科・他領域にはそれぞれその特性に応じたねらいがあり、道徳教育の目標をもれなく指導することは難しい。そこで、各教科・他領域における欠落した部分を補い充たすという使命が道徳の時間に要求されてくるのである。

「深化」とは、道徳以外の教育活動では、道徳教育が直接の目的ではないので、指導が十分である。道徳の時間はその部分をより深めたり広げたりする時間でもある。

「統合」とは、他領域における道徳教育は、個々バラバラにおこなわれている。それを統合し、内外相応する教育を行うのも道徳の時間なのである。

以上のことをふまえて、道徳の時間の学習を通して、道徳的心情や道徳的実践力を育てることをめざしていきたい。

道徳の学習が終わった後、「人間っていいな」「生きてるってステキだな」と教師も子どもも思えるような学習の組み立てをしていきたいと考えている。

以上のことをふまえた上で、研究の視点を達成するために以下のように道徳の時間の工夫について記してみた。

#### ① 児童の実態の把握

どの教科領域でも同じであるが、道徳の学習をするとき、まず大切なことは、価値内容に対する児童の実態の把握である。目の前の子どもをしっかりととらえていく必要がある。授業中や休憩時間の中から、または日記や作文からその実態をしっかりと捉えていきたいと考えている。

#### ② 子どもの学びを深めるための資料選択・資料分析

子どもの実態を把握したら、その時間の資料選択も子どもたちの価値意識を高めるために大切なことである。多種多様な資料から「なぜ、今その資料を取り上げるのか」を押さえ、子どもたちにとってタイムリーな資料を選べるようにしていきたい。

また、資料が決定したら、その資料がどのような構成になっているのか、中心場面はどこなのか、児童がねらいにせまり、思いや考えを深めるために蓄積させる所はどこにすればよいのかなどをしっかりと分析し、授業にのぞんでいきたいと考えている。

#### ③ 多様な考えを誘発する発問の工夫

「発問のない授業はない」と言われるが、道徳の学習も指導者の発問が学習を深める重要な要素となる。どのような発問を設定していくかをしっかりと吟味していきたいと考えている。特に中心場面の発問については、子どもたちの心に揺さぶりをかけられるような発問、人間のもつ弱さや本音の部分を子どもたちが語れるような、そんな共感を誘うような発問を工夫していきたい。

#### ④ 板書の工夫

1時間の学習の流れ、特に心の動きや変容がわかるような板書が大切である。1時間の学

習が終わったとき子どもたちの思考過程がわかるような板書の工夫をしていきたいと考えている。そのためにも学習過程を考えていくときに予想される心の動きをしっかりと考えていくようにしたい。

#### ⑤ 学習指導過程の工夫

道徳の時間は、内容的側面から見ると、資料を用いて、学習者全員が同じ土俵に立ち、一人一人の道徳的実践力を育て高めることをめざしている。道徳的実践力は道徳的実践と違い、「何をしたか」とか「何と言ったか」などの行為ではなく、問題に出会ったとき、内面的な心意から生まれた自覚的なもので奮動を生み出す力である。すなわちあるべきことに対して判断する力、それに支えられて「…しよう」と心が動く内面的な力である。この力が「…しなければならない。だから…する」という段階から、道徳的心情・判断・意志などの内面的な力が総合されて「…せずにはいられない」という心の傾きをもった道徳的自覚にまで深まったとき、道徳的実践力が身についたと言える。

今述べたような道徳的実践力を身につけようと考えたとき、1時間の道徳の学習が深まりのないものにならないように学習過程をしっかりと組み立てていかなければならない。

基本的な学習過程の展開を共通理解し、それをふまえた上で、個々のアイデアを生かして組み立てていけるようにしたいと考えている。

基本的な学習過程を記してみたい。

導 入	○興味・関心を高め、学習課題に対する動機づけや方向づけをする。 ・価値への導入から入る。 ・資料への導入から入る。
展 開	○資料をもとに話し合い活動を行う。 ・中心場面を明確にし、焦点化して話し合う。 ・話し合い活動を通して、自分と違う価値観に出会いながら、自らの考えや気持ちを深めていく。 ○今までの自己の生き方を振り返り、自己を見つめる活動を行う。 (価値の一般化)
結 末	○学習を振り返り、これからの生き方に生かそうとする意欲を高める。 ・教師の説話　・詩を読む　・子どもの作文 ・主人公に手紙を書く　・授業を終えての感想を書く。

#### ④ 「心のノート」の活用

学校教育活動全体の中で「心のノート」を活用するのはもちろんであるが、資料に応じて道徳の時間でも、導入や終末の段階で効果的であると思われるものについては、活用していく。

#### ⑦ 学習の評価と方法

##### ○ 子どもの変容の評価

・子どもたち一人一人の学習状況や授業終了でのものの感じ方や考え方の変化について評価する。

##### ○ 評価の方法

・反応及び変容に基づく方法。

道徳教育の評価というのは数値では表しにくいものである。それは、内面的なものとして表れるからである。だから、道徳の時間を評価するには、学習中の発言やワークシートの書き込みから評価したり、学習後の感想などの変容からねらいに対してどうであったかをみながら評価をしていく。

また、学習前と学習後の自分の変容を書くことで自己評価させていきたいと考えている。

#### ⑧ 授業分析

・ねらい・資料に関する評価

「ねらいは適切であったか」「資料の内容とその扱い方が適切であったか」などについて評価する。

・指導過程に関する評価

「適切な構成がなされていたか」「発問は的確になされていたか」「他教科・他領域等における体験的な活動の成果が生かされていたか」などについて評価する。

・指導方法に関する評価

「ねらいを達成する上で適切な方法であったか」「児童の実態や発達段階にふさわしいものであったか」などについて評価する。

・他の教師や授業者自らによる評価

研究授業や授業者自身によるメモ・録音・ビデオ等によって授業を振り返り、分析する。

#### (2) 総合単元的な道徳学習の展開について

「心の教育」というのは、道徳の時間だけで成し得るものではない。教育活動全体を通して取り組まなければならない。そんなことから、道徳の学習を進めるにあたって、他教科・他領域との関連を図っていくことが「心の教育」を進める上でより効果的であると考えるのである。

##### ① 他教科・他領域との関連のもたせかた

他教科・他領域には個々それぞれに目標・学習内容があり、その達成に向け学習を進めていくが、その中には道徳的な価値内容も多分に含まれている。そこで子どもの意識の連続化を図るためにもそれぞれの教科・他領域でどんな関連をもたせられるか意図的・計画的に組み込むことで充実させていきたいと考えている。

特に大単元構想や中単元構想、小単元構想など、各学年、各学級で担任独自に構想をもち、より効果的な道徳学習を進めてきたいと考えている。

##### ② 体験活動の場の設定

「感動体験が子どもの心を育てる」という前提に立ったとき、どのような体験をさせるのかというのが、子どもの心の成長にとって重要な要素となる。そこで総合的な学習や特別活動などで、地域の特色を生かした取り組みを行い、体験活動を通しての喜びや充実感を味わわせたいと考えている。そしてそこから自己肯定感を育てていきたいと考えている。特に人との関わりを大切にしながら、取り組んでいきたいと考えている。

##### ③ 総合単元的な道徳学習の単元構想について

総合単元的な道徳学習を進めていくとき、その単元構想のもちかたというのが、とても重要になってくる。本校では、総合単元構想を以下のように考えている。

###### A. 大単元構想

1年間または1学期間程度を期間とした単元構想である。「目指す子どもの姿」があり、その達成に向け、他教科・他領域との関連をもたせて総合単元を組んでいく方法である。もちろん、この大単元構想では、一つの価値項目だけでなく、いろいろな道徳的価値項目を織り交ぜた構想となる。

###### B. 中単元構想

1ヶ月間程度を期間とした単元構想である。この期間に子どもの実態を見て、「どんな心を育てたいのか」ということから他教科・他領域との関連をもたせて総合単元を組んでいく方法である。もちろん、この中単元構想では、一つの価値項目だけでなく、2、3の道徳的価値項目を織り交ぜた構想となる。

###### C. 小単元構想

一つの道徳的価値項目に焦点を当て、その心を育てるために他教科・他領域との関連をもたせて総合単元を組んでいく方法である。期間は2、3週間程度であり、これが総合単



元的な道徳学習の最も基本的な構想となる。

以上の考え方を共通理解したうえで、各学年・各学級でそれぞれの中から構想をもち、学習を進めていきたい。

④ 総合単元的な学習の評価について

各自の計画した総合単元的な道徳学習を進めていくなかで、子どもたちの変容した姿や気づきを次年度に生かすようにする。

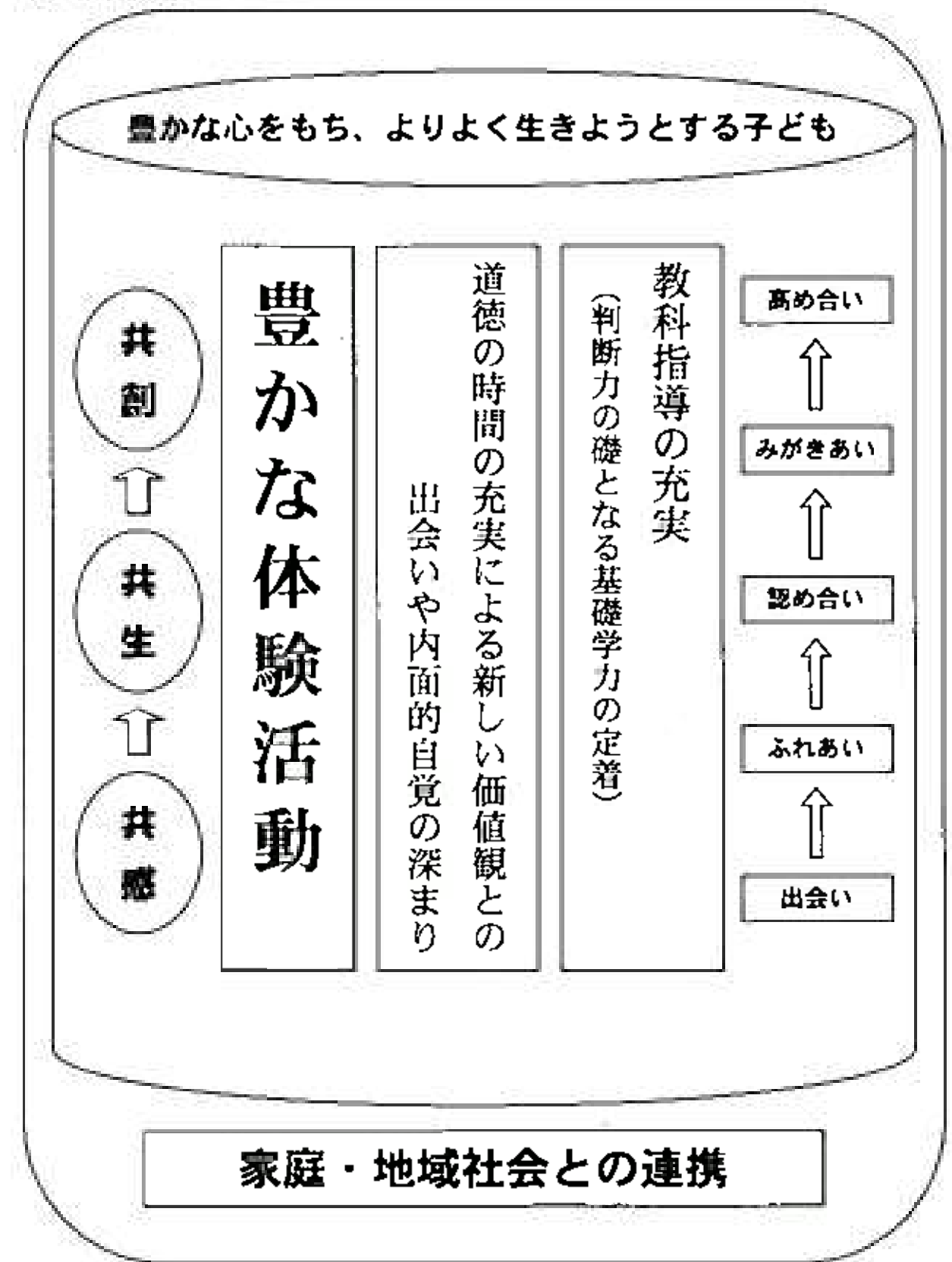
(3) 今年度のテーマについて

『道徳的価値の自覚を深めるための効果的な発問とは』を今年度のテーマとして取り組みたい。

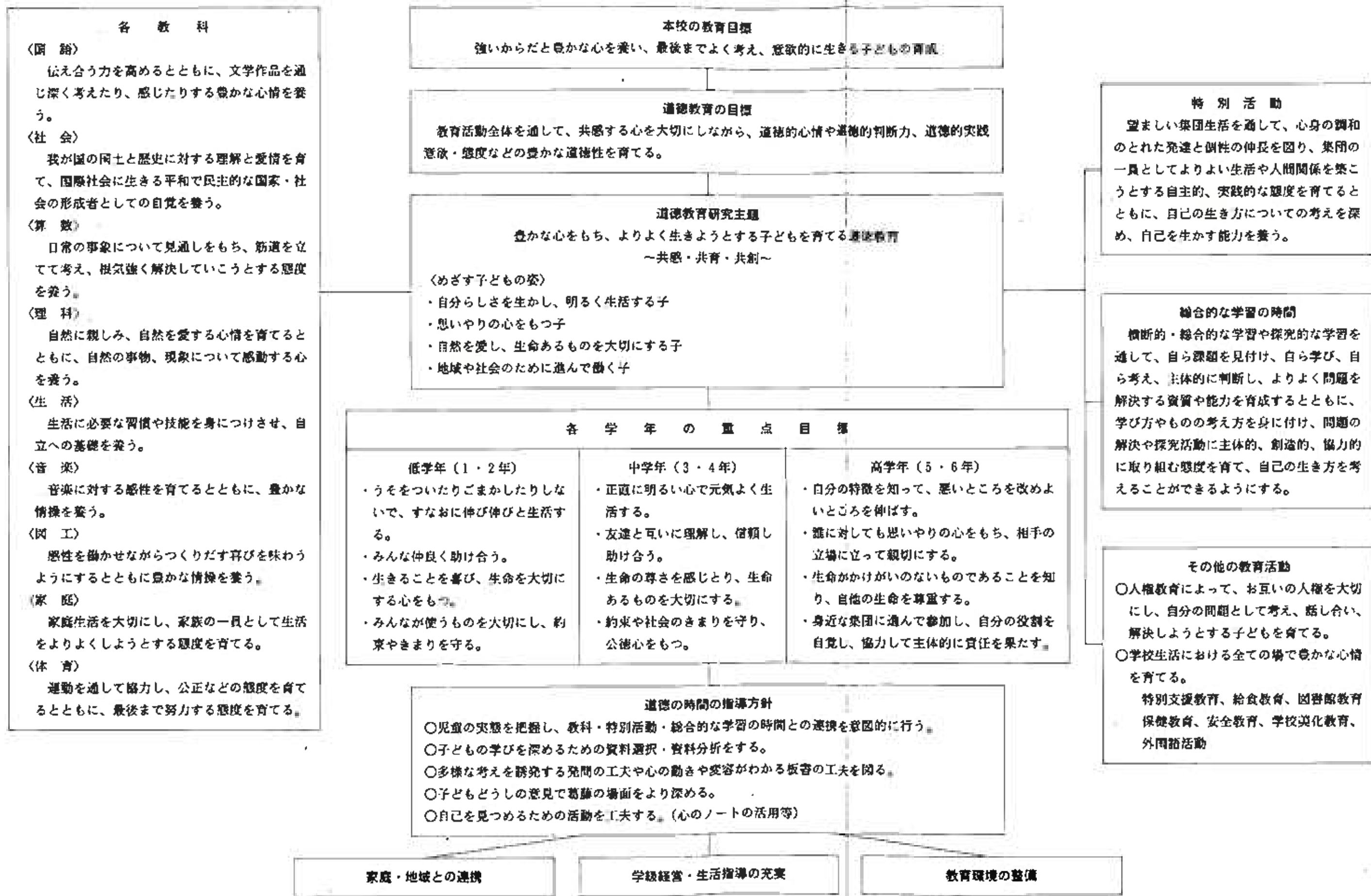
方法としては、

- ・自己の生き方について深く考えられるような各学年に応じた資料選び・発問の工夫
  - ・道徳的価値に気付くために、一人一人の心を揺さぶったり全体での話し合いを深めたりする発問の工夫。
  - ・話し合いが深まるような構造的な板書の工夫。
  - ・自己を振り返る場をつくり、子どもが今までの生活を前向きに振り返るような発問の工夫。
  - ・終末において、高まった価値についての意欲づけ等の工夫。
- 等をおこない、子どもたちが自己を見つめ、これからどうありたいかをじっくり考えるためにどのような発問をしていけばいいのかを探っていきたい。

10. 道徳教育研究構想図



11. 道徳教育全体計画



**各 教 科**

〈国 語〉  
伝え合う力を高めるとともに、文学作品を通じ深く考えたり、感じたりする豊かな心情を養う。

〈社 会〉  
我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者としての自覚を養う。

〈算 数〉  
日常の事象について見通しをもち、筋道を立てて考え、根気強く解決していこうとする態度を養う。

〈理 科〉  
自然に親しみ、自然を愛する心情を育てるとともに、自然の事物、現象について感動する心を養う。

〈生 活〉  
生活に必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養う。

〈音 楽〉  
音楽に対する感性を育てるとともに、豊かな情操を養う。

〈図 工〉  
感性を働かせながらつくりだす喜びを味わうようにするとともに豊かな情操を養う。

〈家 庭〉  
家庭生活を大切にし、家族の一員として生活をよりよくしようとする態度を育てる。

〈体 育〉  
運動を通して協力し、公正などの態度を育てるとともに、最後まで努力する態度を育てる。